

第16回 2020年を振り返りながらこれからの課題も

コロナで明け、コロナとともに年越しをするような状況になりました。しかも、冬の始まりとともに第三の波の訪れで、これまで以上の緊張感を求められそうな気配です。そうした中で、この一年を振り返ってみようと、感染拡大が人びとの健康や生命を脅かすだけでなく、社会、経済、教育を始めあらゆる人々の生活に著しい影響をもたらすことを知りました。個人的にも、非日常的な暮らしがこんなに長く続くとは思っていませんでした。また、コロナで明け暮れたとはいえ、学術会議の任命拒否問題を始め見過ごしてはならないさまざまなことが起きていて、禍根を残さないためのアンテナを絶えず張り巡らす必要を感じています。でも、ここでは、目下進行中の新型コロナウイルススに関する諸もろのこと

何から何まで 後手後手の対応

2月には、突如小・中高の一時休校要請による教育現場と保護者らの困惑や混乱。4月の緊急事態宣言によって高齢者は家に閉じこもる生活を余儀なくされ、施設入所者も入院患者も外界との交流はシャットアウト、親しい家族とも会えず会わさずの「みどり」の悲しさも。医療現場からは感染防護員不足の悲鳴。そして、もろかった医療体制の現実が浮き彫りに。自営業、非正規雇用、フリーランスの人たちの収入は途絶え、先の見えない不安の数かず。「正しく恐れよ」とはいえ、錯綜する情報と連日の感染者数の増減に一喜一憂したこの一年近くで

個人的な努力や犠牲を数えればきりがありません。個人的な努力や犠牲を数えればきりがありません。

国の施策を促す声高めて コロナ禍故の課題の探求を

が、国はこの事態をどのように考え、何をしたのでしようか。現時点においてなお、感染拡大への大方針は聞こえて参りません。「ちょっと変だな」「すごく変だよ」と思うことが、9月の政権交代後もずっと続いていきます。多くの識者が、「コロナ対策に万全を尽くすことが経済再生の大前提」と述べています。そのためには、PCR検査の対象をもっと広げて無症状感

専門的知識と 1年の経験知を

に過ぎ、何から何まで後手対応やコメントに呆れたり怒ったり。そして、又しても医療崩壊を懸念する声が高まっています。国の施策を促す声を高めなければ、コロナとコロナ関連で今後ますます尊いいのちが奪われかねません。

「コロナ禍でも心の距離の短縮を

思い出して下さい。キーボードに触れる時間はあっても、患者さんに直接触れる手のケアの頻度を減らしつつあった看護現場を。訪問介護も細切れの時間内で終わらせなければならぬ状況があつて良心的な介護職者が悩んでいた事実を。何れも、診療報酬、介護報酬がらみですから、国の言う共助のしくみの問題点でもあります。密を避け社会的距離をおくことを強調された結果、近所つきあいもコミュニティ支援も薄らいで孤独になりがちなのは、高齢者はかりではありません。感染を防ぎながら触れる方法、離れていても心の距離を短縮させる方法など、コロナ禍故の課題を探求し続ける必要がありそうです。



いま伝えたいこと

川嶋みどり
健和会臨床看護学研究所所長
日本赤十字看護大学名誉教授

染者を早く突き止め、感染者の移動を避けることが必須なのに、感染拡大を煽るようなOTTOキャンペーンの横行。予想通りの感染者の拡散でしたが、真摯な分析も反省も抜きにマスク会食などを薦める営業理。遅れ遅れの見直しも中途半端な片手落ちの感は拭えませんが、膨大な予備費がありながら、暮らしに事欠く人達への救済策も医療機関への減収補填も未だにされぬまま